

他人の句を芋銭作としたもの

* 赤字は芋銭の文字を誤読、()内に訂正をした。

◎この表の無断転載を禁じます

頁	句番号	句	作者名
48	19	荷のはしに縛り附たる干鱈哉	牛伴
63	74	薄氷やはつかにさきし芹の花	其角
63	75	川狩や地臈の膝に小鍋當(脇差)	一茶
63	76	言葉多く早瓜くるゝ女かな	蕪村
64	76-2	言葉多く里(早)瓜くるゝ女かな	蕪村
69	96	憂きことになれて雪間の嫁菜かな	すて女
71	101	畑打や法三章の札の下	蕪村
71	102	木かくれて茶摘もきくやほとゝきす	芭蕉
71	103	古川の流れを引や種おろし	蕪村
71	104	湖の水まさりける(り)さた(月)雨	去来
72	108	五月雨の大井こしたるかしこさよ	蕪村
73	109	夜ひそかに蟲は月下の栗をうがつ	芭蕉
73	110	うれしさの身にあまりたるぬかごかな	蕪村
74	115	たけかりや阪(頭)を上れば峯の月	蕪村
75	119	ひるがほやどちらの露もま(間)にあい(ハ)ず	也有
76	121	草麥(麦)やひばりが(か)上るあれ下る	鬼貫
76	124	宮はゐ(二日にはぬ)かりはせじな花の春	芭蕉
77	126	日の光今朝や鯛の頭より	蕪村
77	127	帆風のふどしながき(さ)ん春の海	蕪村
82	151	柴漬の沈もやらず五月雨	蕪村
83	152	卯の花の絶間たゝかん闇の門	去来
83	153	凧の地にもおとさぬ時雨哉	去来
83	154	かけかけて月もなくなる夜寒哉	蕪村
87	170	たんぼゝや一目に見ゆる花と煎(莖)	乙二
88	174	何の日そ蠶生まるゝ月かしら	江山
89	175	すゞしさや朝草門に荷ないこむ	凡兆
89	178	しぶ柿の花散(ち)る里となりけり	蕪村
92	190	木枯しや何に世渡る家五軒	蕪村
93	193	さや走る友切丸や時鳥	蕪村
93	195	わかれたる身をふみこみて田植かな	蕪村
95	200	わか竹や是非もなけなるあしの中	蕪村
95	203	川狩や樓上の人の見知り顔(貞)	蕪村
96	207	蠅いとふ身を故(古)郷にひるねかな	蕪村
97	210	たび芝居穂麥がもとのかゞみたて	蕪村
102	231	夕(名)月やうさぎ(き)のわたる諏訪の湖	蕪村

103	234	爐開や床(ハ)維摩に(ニ)掛替る *原句「爐塞きや」	蕪村
103	236	煤拂(払)やくれゆくやどの高いびき	芭蕉
104	237	茶の花やほるゝ人なき靈昭(照)女 *原句「靈聖女」	越人
110	263	手ばなかむ音さへ梅の匂かな	芭蕉
111	264	としくれぬかさきて草鞋はきながら	芭蕉
125	300	はなあぶら卯の花下し窓外に	宮崎鯉軒
129	313	秋の雨辰己(巳)女と北齋と	大曲駒村作?
262	827	冷水に煎餅こねして己(二枚ちよら)がなつ	禱良

* 以上俳句

294	7	六つ七つ指を繰るとき錢呉るゝと乞食はたのしく語るなりけり	横地信輔
294	8	飯ははも食はねど飯は向山の家より乞ふと乞食は笑みつ	横地信輔

* 以上短歌

誤読、転載間違い及び不適切なルビ等

頁	句番号	誤(該当箇所を含む所を朱字表記)	正
45	12	行秋の雷走る苺田哉	電
46	14-1	檜田(やぐらだ)の翠を踏て小春風	檜田(ひつじだ)
46	14-2	檜田の緑を踏んで小春風	檜田
47	18	初時雨己(おのれ)が屋根ふく屋根屋哉	己(おの)が
50	25	木の又に木菟見へて月小さし	木の又に木兔
51	31	納豆汁	原著には無い
52	33	* 前書き 魴	魴
52	33	名を聞て魴(ほう)をちりし旅籠哉	魴(いさぎ)を
52	35	石花菜 * 前書き	石花
54	39	烏去(さつ)て千鳥集まる浦の畑	去(さり?)て 集る
54	41	鴨啼て灯火(とうか)くらし筵織	灯火(ともしび?) 筵織
54	41	* 後書き無し	右三十二年十一月四日吟於梅溪居
56	49	草餅や臼に對する筑波山	築波山
56	50	山蔭に麥青く人見へて畑や打つ	見えて
56	51	雉鳴くや山にわびたる賊の妻	雉子 山にわひたる
56	52	沈香も焚かず屁もひらず鰻(あわび)汁	鰻(ふくと又はふぐと)汁
57	53	竹に描いて蘆に似たりし試筆かな	竹を描て
58	59	飯粒で障子繕う夜寒かな	繕ふ
60	66	綿殻は焚いてしまひぬ大根引	綿殻や
61	68	栗の花散るや檜端(のきば)の古菖蒲	檜端(のきば)の
62	71	注(24) 明治31年から漫画を投稿	裏付ける資料は皆無
63	75	川狩や地藏の膝に小鍋當(こなべあて)	小脇差(こわさぎし) 一茶句
63	79-1	言葉多く早瓜くるゝ女かな	言葉多玖早瓜來留ル女可南 蕪村句

64	79-2	言葉多く里瓜くるゝ女かな	早瓜
65	80	髯こがす猫もひとも夜寒かな	いとど(寵馬)か? 「ひと」 では無いことは確か
65	81	思出す去年の月や芋の句や	芋や句や
67	87	注(35)「穂倉秋色」の画賛句	「鎌倉秋色」
67	90-1	元日やうしろにちりき大三十日	ちかき
67	90-2	元日やうしろにちりき大晦日	ちかき
69	94	二つ子に箸を取らず雑煮悲しさよ	箸取らず
69	95	蓬萊の山から米は生へ候	蓬萊の山
71	104	湖の水まさりけるたさ雨	まさりけりさ月雨 去来句
72	106	草の戸や東籬の胡瓜(キュウリ)花さきぬ	胡瓜(キュウリ) *ルビは原 典による
72	107	晝顔を毎日吹くや富士南	晝良を
74	115	たけがりや阪を上れば峯の月	たけかりや坂を 蕪村句
74	116	一雨が税にも足らぬ陸稻(オカボ)かな	陸稻(オカボ)かな *ルビ は原典による
75	117	菊喰(キクク)ふて酒醸したる恨みかな	菊喰(キクク)ふて *ルビ は原典による
75	118	雀等(スズメ)よそれ豊年(ハウネン)ぢや豊年(ハウネン) ぢや	雀等(スズメ) 豊年(ハウ ネン) 豊年(ハウネン) *ルビは原典による
75	119	ひるがほやどちらの露もまにあいず	間に合はず 也有句
76	122	初鷄や大河をへだつ間の聲	初雞や
76	123	鋏始八重九重千代の春	千代春
76	124	宮はみかりはせじな花の春	二日にはみかりはせじな 芭蕉句
77	125	己が春小鳥打つなと叱りけり	己か春の
77	127	帆風のふどしなかきん春の海	なかさん 蕪村句
77	127	注(61) 春の海飛んだ難船	春の浪
77	128	雞(にわとり)賣りて正(ただ)しく淋し草の庭	雞(とり) 正月淋し草の廬
78	129	蒔の臺かゝれし九十のおうな哉	「かゝれし」ではない 不明
79	136	注(67) 大艸句意	丈艸(*内藤丈艸)
81	143	草餅やたしか王維(オウエ)に娘あり	王維(オウゐ) *原典による
84	155	七艸に蓑編み始む家例かな	蓑編み始むる
84	157	網に透きて蟹の子遊ぶげんげかな	蟹の子
85	161	田螺煮て一人住むらん種井番	すむらん
86	166	ミレが晝の牛も羊も寝積(ねつ)むか	寝積(いねつ)むか
87	168	たんぼゝの花にも座して佛達	仏達
87	169	たんぼゝや一目に見ゆる花と煎	花と莖 乙二句
88	171	行春や薩摩守が草枕	171,172は文章の一部
88	172	曉風夢を吹く毛蟲の巢	171,172は文章の一部
89	178	しぶ柿の花散る里となりにけり	しぶかき 花ちる 蕪村句
89	179	古沼に苗こぐや五月雨	苗舟こぐや

90	181	栗の花散るや軒端の古菖蒲	No.68と重複 *削除すべき
90	182	薬掘り死ぬの忘れたおやぢかな	薬掘
90	183	栗したゝか隣へこぼす野分かな	隣え
91	184	能因のあたまにのたるあつはかな	のこるあつさかな
91	186	注(104)に同じ	題名無し 注は不要
91	187	朽野(くちきの)やかれて背高き女郎花	朽野(くたらの)や
92	188	拾得も見えず門前の落葉かな	見へず
92	189	茶の花に拾得の箒かき添えぬ	添へぬ
94	197	一つ家に萱草見れば猶暑し	一つ家
94	199	下手な字も遊女なりける夏出かな	下手の字
95	201	故郷は桃も荊も毛蟲かな	毛虫 蕪村句
95	203	川狩や樓上の人の見知り顔	見知り良
96	204	浪の上腰蓑の人涼しけれ	腰蓑 涼しけれ
96	207	蠅いとふ身を故郷にひるねかな	古郷 蕪村句
98	215	雨五月一刀三禮の佛なりぬ	三種
99	220	思出の初葦飯や松かさよ	初葦飯よ
100	221	初紅葉馬鹿され給ふ縦五位殿	従五位殿
100	221	注(140) 漫画「薬掘」の画賛句	「つままれ」
101	226	此石より野分起りぬ神鳴りぬ	起りぬ
102	229	盗み喰う佛手柑苦し小春寺	喰ふ
102	230	初雁や一人耕す山畠	初厂や 耕やす
102	231	夕月やうさぎのわたる諏訪の湖	名月 うさき 蕪村句
103	234	爐開や床維摩に掛替る	床は維摩に 蕪村句(原句では、爐塞ぎや)
103	235	冬川や鴨あさりゐる橋の下	あさりゐる
103	236	煤拂(すすはらい)やくれゆくやどの高いびき	煤払(すすはき) 芭蕉句(疑義もあり)
104	237	茶の花やほるゝ人なき靈昭女	靈照女 越人句(原句では、靈聖女)
104	237	注(153)漫画「靈昭女」の画賛句	「靈照女」
107	253	人を白眼(しらめ)めば鰻(あわび)になるとよア一恐わや	白眼(にら)めば鰻(ふぐ)に
107	254	行年や廁を守る廁神	廁を 廁神
109	258	チンポコの果報に手を打って衣更	手打って
109	260	塗師鍛冶と争う踊かな	争ふ
111	265	しほ鮭に葉書が二枚元日サ	元日す
112	268	秋の燈(とう)に梨子買ふゆなもさびしかり	秋の燈(ひ)に
113	270	蚤虱芭蕉浴みし鯖湖(ゆ)湯に二百年來秋の燈	鯖湖(こ)湯に *俳句に非ず短歌の項へ
113	271	注(170) 源源経の四天王	源義経
122	290	氷柱(すごもり)の奥に畫蒔く人戀し	氷柱(すごもり)
123	292	寒聲や梅も句はぬ藝者町	句はぬ
123	293	毒草の縁日に入り日麗	縁り目に入り 芋銭の句か

123	295	* 前書き 國技館の菊はと問はれければ	秋
124	299	新茶など牡丹散りぬる雨續き	新茶杯 雨讀かな
125	301	讀殘(どくざん)の書や茸飯に淋しかり	* ルビは適切か？
129	313	秋の雨辰己女と北齋と	芋銭の句か
130	315	二十日近く種芋も芽角出しにけり	出しけり
130	317	さかたてる金城の奥五月雨	五月空
131	321	吠ゆる黄檗の狗(こう)斷(だん)ぜん秋	狗(いぬ)斬(ざん)せん秋
134	329	狸(ね)丸(まる)寒(か)きか我年忘れ	狸丸
135	333	* 前書き 草蘆春雪即景	草蘆
136	336	* 前書き 妙高暮雪	夕陽
138	343	春雷すれど古蕉芽さゝざるさびしみ	芽さゝざる
140	351-1	夏の雲このいたゞきを湧き出でぬ	いたゞきを
140	351-2	夏の雲此嶺(みね)を湧き出でぬ	此嶺(いたゞき)を
141	352	里芋の花は佛子(ほっす)に似たるもの	拂子(ほっす)
141	353	菊を摘んで養きたる人のうつくしき	養きたる 美しき
141	354	野分の夜小蟲(こむし)哀れむ几邊(いへ)かな	小虫 几邊哉
142	356	つく／＼と蟲の音寒き都かな	つく／＼(*濁点付き)
145	364	草の夏草の夏だと飛び廻ぐる	飛び廻ぐる * 暮鳥宛書簡による
145	365	晝の月の下に小サイ／＼名無草	小サイ々々
145	366	餘花にふかれて二人で居たい	二人居たい
145	367-1	雀の豌豆(まめ)に風の光る朝だ	豌豆
146	367-2	雀の豌豆(まめ)に月の光る朝だ	豌豆
146	368	時鳥雀の豌豆(まめ)莢になる	豌豆
146	369	夏川が夏海に注ぎけり	注ぎます * 暮鳥宛書簡による
146	370	* 前書き 時鳥銚子は岡のトツ端(た)んと題し	トツ端(ばず)れ
148	376	花吹雪老木の洞に吹きたまる	吹たまる
148	377	麥の花大杉(おおい)囃子(ばし)の遠音哉	大杉囃の
153	388	栗の花(くり)観音道(くわんおんみち)夢にも似たる今忘れ得ず	栗の花、観音道、夢にも似たる、今忘れ得ず それぞれに読点あり。俳句にあらず文章の一部
154	391	卵(たまご)の花の散る音さびしみガラス越し	柿の花
154	392	嫁入(よめいれ)の狐(きつね)や石灯(いしとう)栗の花	狐の灯
156	399	大なる空の澄める秋の雷	秋を雷
156	400	常(つね)の木菟(う)がなかぬ霜(しも)の朝なりけり	木菟が
157	402-1	一人歩めば祇林(ぎりん)畫(が)にして曼珠沙華	祇林(ぎりん)畫(ひる)にして
157	402-2	一人あゆむ祇林畫(ぎりんが)にして曼珠沙華	祇林畫にして
157	402-3	一人歩む祇林畫(ぎりんが)にして曼珠沙華	祇林畫にして
157	403	* 前書き 丹波(たんぱ)旅中、此頃(このころ)の秋霖(あきぐし)にて芝居(しば)も相撲(すもう)もなくて止(と)みたり	* 前書き 秋霖(あきぐし)に芝居(しば)も相撲(すもう)もなくてやみたり

158	406	畫(が)の龍は尚畫の龍にして藥掘る	畫(え)
159	409-2	* 前書き欠落	* 前書き 石像寺山觀月
159	410	猪(い)は小屋に狐は穴に夜寒かな	猪(しし)
160	412	猪をどしと並んで見たり秋のくれ	秋の暮
160	413	猪をどし顧りみ歸家の親子かな	親子哉
161	419	口そゞぐ石もありけり水の秋	口そゞぐ
162	420	露萩を垂る石の聲(こい)	聲(こえ)
164	427	蓮青く谷水石をめぐる秋	めぐる秋
167	438	* 前書き 「三三庵(みみあん)便り」	三三庵(ささあん)
172	462-1	我顔はせ劍(けん)にてらす雲の秋	劍(つるぎ)
172	462-2	我顔はせ劍(けん)にてらす雲の秋	劍(つるぎ)
173	465	紫苑咲けば古郷想ふ夕月夜	咲けは
176	476	王羲之の子に子猷あり雪に竹	王羲之
176	479	枯魚(かれうお)の肆(し)に歳暮の人や何喚ぶ	枯魚(こぎょ)の肆(みせ)に
178	484-1	春之雪水草生ふ沼を思ひり	思ひけり
179	489-1	石燈に小雉立ちぬ雲の寺	* 昭和元年の作
180	490	汗の額芭蕉廣葉に拭(はら)はゞや	拭(ぬぐ)はゞや
180	494	嫁は姨は桑つむ茶摘む時鳥	茶つむ
181	497	秋が來たよと瘠骨を風を撫で	風が
183	503	鴨なけば木菟も啼く夕かな	木兔
184	507	春雪深く路の臺もかみ得ず	深し
186	517-1	垣竹の穴より出づる秋の聲	出つる
186	517-2	垣竹の中より出る秋の聲	秋の聲
186	519	雁鳴くや獨釣の沼寒の沼	寒の雨
188	524	潮音(しおと)や太平洋の夏の雲	潮音(しほのね)や
188	525	仰きけり夕立つ富士を濡れながら	仰ぎけり
189	533	ながき夜や鯨も一つ鳴いて見よ	なかき夜
190	536	古蕎麥の新蓑の田の面(も)の家	新蓑のあの田の面(ミ)の家
191	540	枯れながら朝貌さけり小六月	枯ながら朝顔
192	544	筆毎に秋の光の尊とさよ	光りの
193	545	窓に人なし西湖僧舎の小春かな	僧舎
193	546	黄鶴山樵松に點ずる秋の聲	點する
193	547	雲林の冬が來たぞよ蘆の霜	芦に霜
194	549	淺峰(あさみね)の天地の秋に驚ろく計り	淺鋒の * ルビ(あさみね)は誤り
194	550	亂麻皴淺黄(あさぎ)大の秋	淺鋒黄大■の秋 * 原典『美之國』では活字一文字分空白あり * ルビ(あさぎ)は誤り
194	552	尊とさよ石青寒し秋の浪	尊とさに
195	554-1	春の水鏡北に筑波西に富士	富士の
195	555-1	春の沼雨カイツブリが鳴くばかり	鳴く計り

196	556-1	蓐(じゅん)の芽にふる雨春惜しむ	蓐(めなわ)の芽
198	565	夢破るゝ枕上(ちんじょう)に蟲の聲カネタゝキ	枕上(まくらがみ)
199	569	木下闇を怖れ切りすかした樹(じゅ)はモチの木	樹(き)
199	570	霜清く蓑あみをはりけり貧女	蓑
199	572	曠野千里ことしも冬至の日	冬至の夕日
199	573	冬至の夕日を落葉踏み／＼歸る	踏み々々
201	580	椎の上を飛行船など春の雲	飛行船など
204	596	九十六の媪(おう)も交じる百草採り	媪(おうな)も交じり
205	601	蟬始めて聲はなちけり五月雨	始て 五月間
205	602	初蟬の聲かとも思ふ五月雨	五月間
205	603	初蟬の聲に驚く林間	驚ろく
205	604	*前書き 千代が魂に回向す…二十八日也	廻向 二十八日
206	605	登良が涙千代が涙も五月雨	登良か涙千代か
206	606	殻をかけて木槿(もくきん)垣根の蟬の聲	木槿(むくげ)
206	607	水漬(すいてい)やげんのせうこの花の上	水漬(みずばな)
208	611	落つる栗須賀川はさぞ月の雨	落る栗
208	612	雨の秋夕白河酒林	雨の秋の夕白川
208	615	無花果の葉か翻へる八朔	葉が
210	621	石にしむ聲の秋と時雨けり	629、621の順序で一纏めになるべきもの
211	627	一八の葉縁に時雨けり	葉の縁に
212	628	一八の縁と石の時雨かな	縁と石と
212	629	一八の縁と石と枯菊と	629、621の順序で一纏めになるべきもの
212	632	豆ランプ悲しき几一人夜寒	戀しき
213	633	椽(てん)にふむ落葉の音一鳥鳴かず	椽(えん)
213	634	後架かよひの椽にふむ朝夕の落葉	後架かよひ
213	636	霜の畑紅葉摘みのこされし	紅菊
214	638	*前書き 旅中風邪	前書きは存在しない
214	640	赤き萼のみ残る枝に残梅數点白し	數點 *640と641で一つの文章、俳句には非ず。
214	641	雨絲の如く豆畝にそゞぎて寒し	*640と641で一つの文章、俳句には非ず。
215	642-1	菜の花さくや鯛むしろの敷合せ	鯛席(むしろ)、敷き合せ
217	653	櫻紅葉樹(じゅ)もくたけたり小夜嵐	樹(き)
219	660	魚あぶる水國寒し蟹婦(アマ)のひび	蟹婦 *原典にルビなし
223	675	春立つ日ぞ庭の石ころ達	石コロ
223	676	浅春(あさはる)の舟と人見ゆ藪遠き	ルビは「あさはる」で良いか
223	677	黄水仙の渦紋のうごく障子かな	黄水仙に 動く 障子哉
224	678	初雷や草庵の芋角いだせ	角いたせ
224	679	初雷すづんと角出せ穴の芋	つんと
224	680	玄賣の水草ぞ沼の蘆の角	水草そ

225	685	顔も洗わず落花の梅に浴しけれ	鳧(けり)
226	687-1	此川や櫻續粉魚になり	續紛
226	687-2	此の川や櫻續粉魚となり	續紛
227	693	* 前書き 泊雲病癒ゆるときゝて	癒ゆと
228	693	時鳥病鬼忽ち消へてけり	忽ち
231	705	無花果の露ちる舟や鴨の聲	鴨の聲
231	707	古松を撫すれば夕日する冬至	撫すれば
233	712	枕上(ちんじょう)に朝鮮鐘の音を撫す	枕上(まくらがみ)
233	713	小鍋洗ふ子や飯粒流す冬の川	洗ふや
234	716-1	地藏會(じぞうかい)の女ゆきゝする小春村	地藏會(じぞうえ) ゆきゝす
235	720	* 前書き 皇太子御誕辰	御誕辰
236	724	雲雀鳴くや潮音(ちょうおん)鳴る松越しに	潮音(しほのね)
237	727	朧夜や醜女の名のある海の神	名ある
237	728	ゆく春を十二の橋のさびしさよ	さびしさよ
238	734	* 前書き 観音禮讚	禮讚
239	737	コップに挿す釣鐘草は淋しけれ	挿す
240	741	都人はみやこに歸れ秋の浪	みやこえ
240	744-1	へひさうの花ふみはしる秋時雨	へひさらの
240	745	木を岩を松鼠(むささび)とぶ秋時雨	松鼠(りす)
241	747	夕月に松の大樹の松鼠かな	明月に
241	749	門を出れば唐辛子の夕日かな	出れば
242	753	茸やきて毘沙門岩を仰ぎ喫む	仰き
243	756	前松に栗鼠あそぶ見れば春隣る	この句は「あしか島にて」と題して纏められてる。746の後に入れるべきもの
243	757	栗鼠雌雄の巢に眠りつゝ寒の内	この句は「あしか島にて」と題して纏められてる。746の後に入れるべきもの
245	764-1	山歸來の若葉朝な／＼の露	露
245	764-2	山歸來の若葉朝な／＼の霞	露
245	765	雪の春豆苗恙なかれけり	恙なかりけり
246	769	振り袖の幽霊ゑがかん花の春	ゑがゝん
247	773-1	砂の山西瓜畑へころがらん	畑え
247	773	* 後書き 昭和十年六月十四日付…句番号七七四～七七六の三句	二十三日付 七七五 七七六は七月十三日付
248	774	南薫に孔雀の卵孵りけり	かゑりけり
248	775	孔雀眠りて雲雀の空の青きかな	青き哉
248	777	* 後書き …『芋銭子文翰全集』	『芋銭子作品撰集』
249	780	馬鹿は馬鹿なりに六十八の月かなし	ばかなりに
249	782	船影島影全く絶え沼上秋寥々	絶へ
254	798	初雷の雲に接する野川かな	野川哉
254	801-2	梅が香に黒暗々の虚空哉	虚空哉

255	803	良寛のすみれつみしもこんな日か	日が
255	805	寂然と筍(しょう)一つ生ひにけり	筍(たけのこ)一ツ
256	807	若草深く藏しける温泉寺	若葉
257	811	菊なますうてなのにかき好もしも	にかき好もしき
258	814	814-1,2,3の句	過去の作を思い出して記した。したがって11年作ではない。
261	825	朝顔の花の中へ西瓜を置いて見る	花の中え
262	827	冷水(れいすい)に煎餅こねして己がなつ	冷水(ひやみず)に煎餅二枚擣良がなつ 三浦禱良句
262	829	藻をかる舟去って月一銀	月一痕
264	838	* 後書き 典拠「龍一宛書簡」	該当無し
269	849	豌豆苗の二寸に初雪が	苗の
269	850	おぼろ夜の片ほのしろき木の間かな	木の間哉
270	854	木の芽の地藏院に鐘が鳴る	木の芽の雨の地藏院の鐘がなる
271	860	若葉雞喰みて勿忘草残りけり	勿忘草の
271	861	廂葉(ひさしば)を蝶とも見たり五月間	病葉(わくらば)
273	869	浅茅生(あさぢう)や鬱金明らかに花カボチャ	ルビ「あさぢ」なら次は「う」ではなく「ふ」 鬱金
273	870	瓜作る君が阿禮など夕涼し	阿禮など夕涼し
274	876	さびしきは櫳の若葉にふる雨は	さびしききはみ
275	879	戦の音が聞へるやうな唐黍の實	唐黍の空
279	899	飛行機も悲しき音の秋の暮れ	飛航機
279	900	小春の暮雲に方し雞と犬	声し
279	903	頭をあぐれば雲に鳥なる年の暮	あぐれば
280	905	* 前書き 今日をいきた翁	いきる命
282	914	松の花降る古池に風細き	古沼に
282	916	ゆく春を十二の橋のさびしさよ	728と重複 * 削除すべき
282	917	つくばねの新桑の芽や春の水	新桑の芽や
284	924	虫賣の妻の空(から)賣や秋悲し	豆(まめ)賣や秋涼し * 明治41年の項へ
284	926	六の花はく帚くら見ならされ	帚から

* 以上俳句

289	1	草紅葉草に寝ころび旅畫師が沈思の夕源女節きく	艸に
293	5	餅花の櫓の枝筋數へつうすくらき春の酔心地かな	數へつつ
295	9	未來派のいやな繪様の街を去り野邊に住ひば屁ひり蟲飛ぶ	野良に住へば屁ひり虫飛ぶ
295	10	提灯の消へたるまゝに凹凸のくらやみ坂を唯一人ゆく	消えたるまゝに凸凹の 只一人ゆく
296	13	白山羊の白き乳飲をのむ朝またき下野の山時雨けりしも	時雨るらしも
297	15	白樺の百里の森に分け入りて毛物の如く我は住むべき	分入りて

299	19	水天と分かぬ朝氣の沼邊(ぬまべ)に芒焼きつゝ歌ふは誰子ぞ	沼邊(ぬまのへ) 哥ふは誰子ぞ
299	20	ほの／＼(濁点)と薬草萌ゆる庭の邊に春の光にしたる我はも	ほの／＼と 邊の
300	22	我庵はあしかの嶋の一つ庵いはりもしまもさみたれにつゝ	我庵
300	23	飛行船黄なる紙の森にかくれ冬の天空只に静けき	黄なる帛
301	25	年の瀬の流るゝ如く我淋巴めくれる時ぞ病なからん	時ぞ
301	26	小松生の丘邊に立ちて今日も見ればあしかの嶋はさみだれにつゝ	さみたれにつつ
301	27	斷食の後のうどんをあなうまし／＼とすゝりけるかも	あなうましようまし／＼と
302	28	病むひまの夢はやぶれて芍薬の香を闇にかくかなしかりけり	闇にかく
302	29	苺熟れ頬白歌ふ此森に今日來にけり病わすれて	哥ふ
302	30	* 前書き 冬至	前書きは存在せず
307	38	稻穂かむ猪(いのしし)の鼻先しう／＼と只秋風の吹きて過たり	猪(しし)
309	45	深雪ふる荒野は早くタベしてランプともりぬ鍬鍛冶の家	タエして
309	46	* 前書き 春雷	前書きは存在せず
310	49	南無觀世音を念じ奉れば心にすめる和田津美の音	奉れば
311	50	神の如ト海原かける大鷲を雲かくるまで眺め入りつゝ	神の如と
312	54	燈臺の霧笛なりやみ海晴れて水平線に舟のはろけき	海はれて
312	56	* 前書き 潮光庵庭前	庭前即興
314	61	ポチャ／＼と子等が遊べるプールの上にコロ／＼花が赤くさいている	赤くさいてる
314	62	* 前書き コロコロ花は畫貌	畫貞
314	64	筍(きょ)喰ひて病忘れし昔法師名は芋錢とは申さざりけり	筍(いも)
315	65	大海の音を聴きつゝ只一人友が詩集の挿畫かきしか	友か
315	66	こゝに來て吾友思ふ海の音久遠にひゞく海の音かな	久遠にひゞく海の音哉
315	67	* 前書き 河原撫子	是は葎茨しげみたる中より河原撫子を見出したる時
316	69	一ト月も雨の潤ひなしといふたなつものなる枝豆の瘦せ	潤ひなしと云ふ 枝豆の瘠せ
316	71	飢鳥の喰みこぼしたる山梔子の實にそまりたる春の雪かな	喰みこぼしたる
317	72	芭蕉葉の青きが上に雪ふれば王維貌なる草汁庵の主	青きが上雪ふれば王維顔
317	73	* 前書き 嘗て福島に遊びて人肌石を見たるを	嘗て 遊び 見る
319	78	病める友は静かにあるか初夏の一八の花の白きを歌へり	一八の花
319	79	芍薬の臺(とう)小さき庭の邊に立ちつゝ思ふ友の病を	苔(つぼみ)
321	83	大海のなみの樂の音をきゝしより白衣の君をひたに戀(こい)ひつゝ	戀(こ)ひつゝ
321	84	竹の葉の杯(はい)すてし芋錢子を如何に笑ふか七(なな)の賢人(かしこびと)共	杯(さかづき) 七(ナナ)の賢人(カシコヒト) * 原典にルビあり、凡例に準ず
322	85	篠蔭に春龍膽(りゅうたん)の花片の小さき累ねを見つゝも可愛しも	龍膽(りんどう) みつゝ可愛しも

322	86	高潮の音に昂りて鳴く雲雀舞々なきて雲かくれせり	高瀬
322	87	一人居りて畳に葡(は)はず宿居蟲(やどかり)の行衛(ゆくえ)も知れず春雨の晝	葡(は)はず寄居蟲(やどかり)
323	88	春の日の畳にかゝみやどかりの縁(えん)に落ちたる音をきくかな	椽(えん)
323	89	砂丘の濱晝貌に寝ころべは眉の上行く海(あま)の釣舟	海士(あま)
323	91	* 前書き 常陸風土記を讀みて	よみて
323	91	梅ヶ香に窓の戸閉ちて只一人烏機織る常陸乙女は	閉ちて
324	92	* 前書き 嘗て詣でし高野三山を忘れず	嘗て
324	93	空谷の高野の山に咲く花のひとりしつかは愛(いと)しかりけり	さく花の 愛(いと)しかりけり
325	94	さみたるゝ高野の山の谷にして今は咲くらん一人静の花	今や咲くらむ
325	95	五月雨の高野の山に見し花のひとりしつかは愛としかりけり	愛しかりけり
325	97	* 前書き 牛久の南に餅貝の化石出づる丘あり	牛沼の南餅貝の化石出づる丘
325	97	古沼の餅貝の化石掘る丘は土赤々とさみたれにつゝ	さみだれにつゝ
326	97	* 後書き …それは悠久感と共に甚だ凄寥の氣に打たれ…弘法の石饅頭と呼んでいる蛸枕(餅貝)の化石が…	凄寥 蛸枕(餅貝)の化石
326	98	さるとりのはなののはつはなかなしみてあさの野をゆく雨すこしふり	あさののを
326	99	* 前書き 潮光庵外逍遙	次の100の前書き
326	99	茅花(かやばな)飛ふ磯丘の野の夕暮はやませの風の髯に寒むしも	茅花(つばな)飛ぶ
327	100	犬吠の磯丘原のタベみち髯にしむしややませのふくも	タへみち髯にしさむし
327	101	煎餅屋で餅搗く音青磁の鳥の羽根する聲春は隣になりけるかも	隣になりけるかな
328	102	病みぬればつく／＼(*濁点)思ふ宇宙觀粟つぶにも似たる我身愛しも	病みぬればつくづく思ふ
328	103	このころをやみつゝあれば枕上障子にうつる寒梅の蔭	このころをやみつゝあれば
331	104	鐵の火を心に生きし君が魂(たましい)今紅の梅と化しけり	魂(たま)
332	108	朧寄の磯邊が岡を上りゆけば我足にふれ墓の葡(は)ふ見ゆ	葡(は)ふ見ゆ
333	112	天つちの大籠の中の富貴の臺妹か母指程に紅して	天つちの 富貴の臺、(*臺の後に読点あり)
333	114	秋の夜は寝ざめさびしきあしかじまあしかはなかでうしお鳴りつゝ	秋の夜は寝覚さひしきあしか嶋あしかはなかく潮なりつゝ * 本来総てを万葉仮名で記すべきもの

* 以上短歌

以上の他、凡例に反する物が多数存在するが省略した。

Copyright (C) Ken Kitabatake. All Rights Reserved.